日野宮神社蔵　伯牙弾琴鏡（唐時代）

標本

昭和51年度秋季特別展

若越の外来文化展

解説総目録

昭和51年度秋季特別展

若越の外来文化展

解説総目録

常宮神社蔵朝鮮鐘　部分

10月1日——10月31日

福井市立郷土歴史博物館編

はじめに

中央の京畿にも近く、北陸道の要衝でもあった越前・若狭は、三国・敦賀・小浜の三良港を持ち、対外的に見ると、殊に大陸との交渉において、表日本と称しても過言でない地域でありました。一、二の例をあげれば、敦賀湾沿岸には半島系の神が奉祀されたことを思わせる神社が、今日まで連綿と存続して、古代に於ける半島民族の当地方来住を示しておりますし、延暦十年（七九一）九月、若狭・越前以下五箇国に、牛を殺して漢神を祭ることを禁じた太政官符が発せられ、更に同二十年（八〇一）重ねて越前のみに令して、この風習を禁じた事実も、平安期に至って、なお大陸系民族が若越の地に多数土着していたことを想起させるなど、枚挙に遑がありません。これら頻繁な来航者との通交を便にするため、敦賀に松原の客館が設置されたこともまた、越前の対外的立場をよく物語るものでありましょう。

古代よりの、かくのごとき民族間の交渉は、同時に数多くの外来文化をもたらすこととなり、それぞれに様々の発展を遂げています。こうした地理的環境は、若越の人々に外来の文化を受容し、よくそれを理解し、消化しうる気風を形成し、近世以降西欧文化導入に至るまで、各種の文化遺産を今日に伝えてきました。

この点を一層明確にし、若越と外来文化の交渉史を再認識するため、本特別展を開催することに致しました。これが郷土をより深く理解する一助となりますれば、誠に幸甚の至りであります。

本展の内容充実のために、或いはこの目録刊行のために、門外不出の御秘蔵史資料の提供及び目録への写真提載を御承諾下されました各位に対し、心から敬意と感謝の意を捧げる次第でございます。

昭和五十一年十月

福井市立郷土歴史博物館

凡　例

一、本書は昭和五十一年十月一日より同月三十一日までを会期とする、秋季特別展「若越の外来文化展」の解説目録である。

一、本目録は前半部に主要展示史料の写真を収め、後半部に「I大陸との交渉」「II西欧との交渉」の二部門に大別し、それぞれの史料を原則として陳列の順に従って収録解説してある。

一、それぞれの史料に付した「史料通し番号」は、本目録内に関する限り図版（写真）番号、列品題籤ともすべて共通している。

一、会期中、本目録中の史料の展示換えや、目録以外の史料を展示することもある。

⑯重要文化財　世界図屏風

Ⅰ大陸との交渉

(1)古　代

①銅造　伯牙弾琴鏡

③重文　絹本着色　主夜神像

④重文　絹本着色　阿弥陀如来図像

○国宝　朝鮮鐘

(2)中世以降

(イ)宋文化

⑤紙本墨彩　風竹図

⑥県指定　絹本着色　雲居道膺和尚図像

⑦県指定　絹本着色　伝如浄禅師図像

⑧県指定　絹本着色　釈迦三尊図像

○木像　釈迦如来頭部残欠像

(ロ)明文化

⑨絹本着色　花鳥図

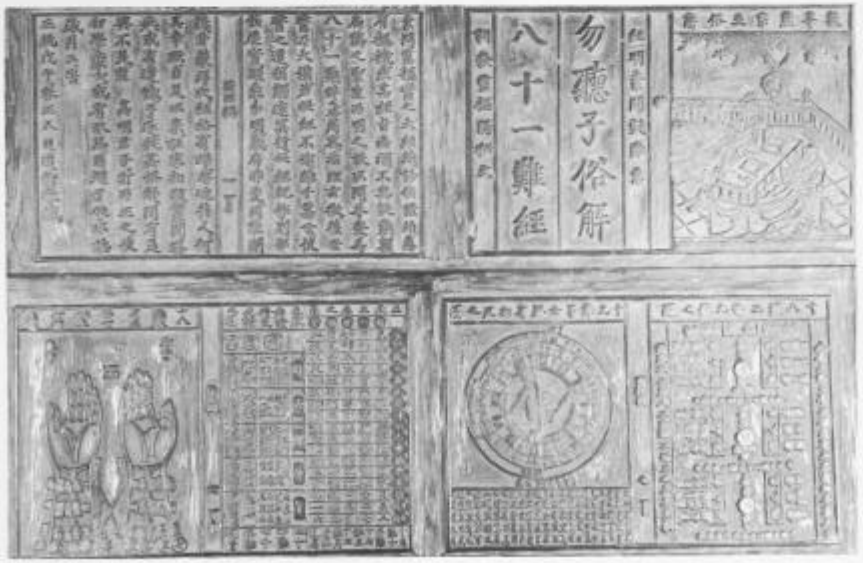
⑩絹本着色　仙人図

⑪絹本着色　東籬図

⑫木造　聖観音菩薩立像

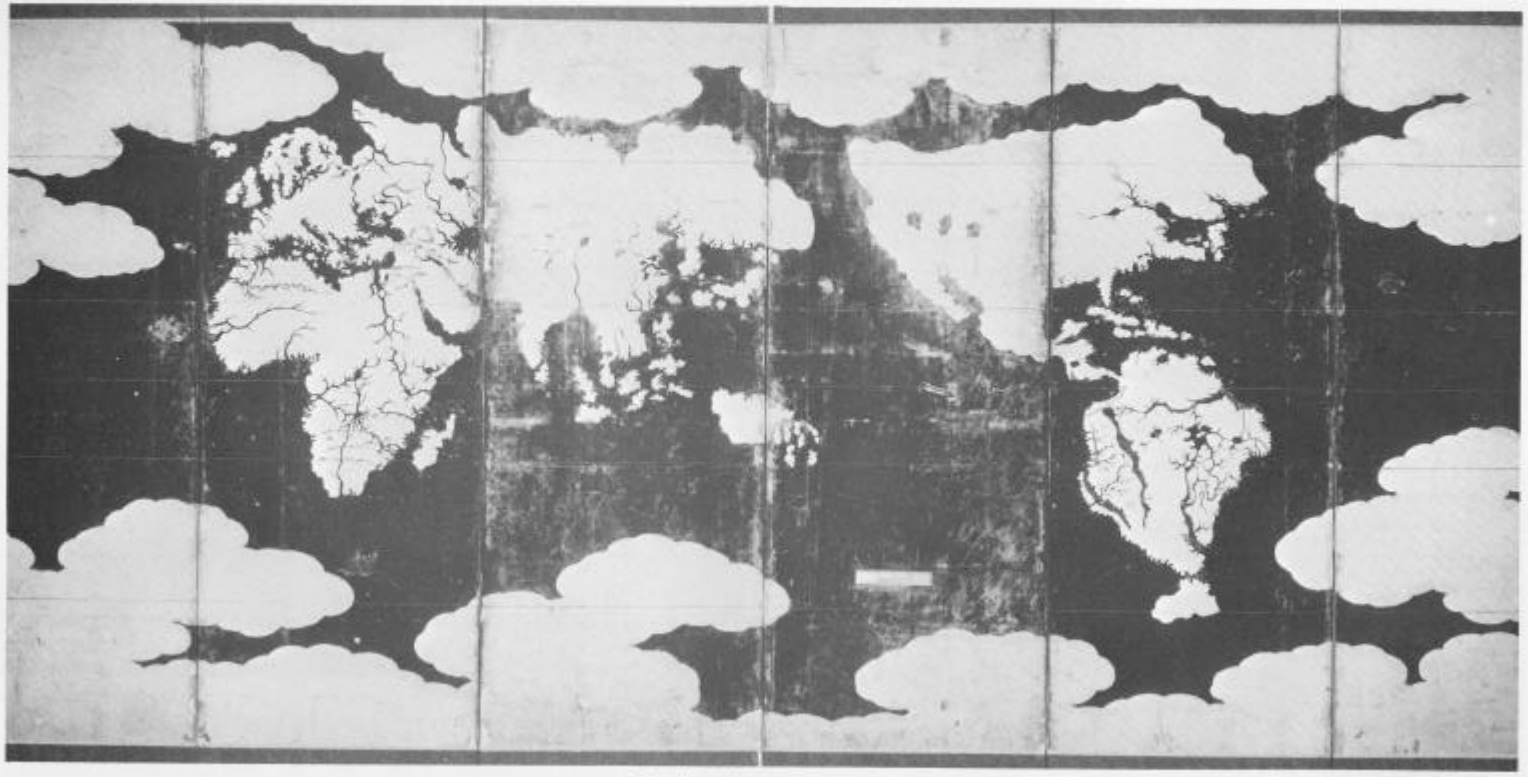
⑬明版　八十一難経

⑭県指定　越前版八十一難経



II 西欧との交渉

(1) 中　世



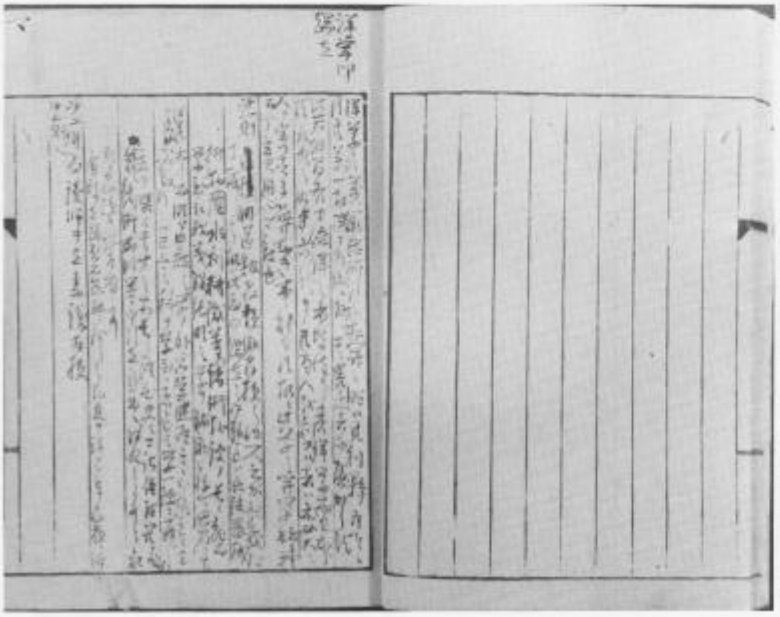
⑰紙本着色　世界図屏風

⑱紙本着色　南蛮船図屏風

(2)近世以降

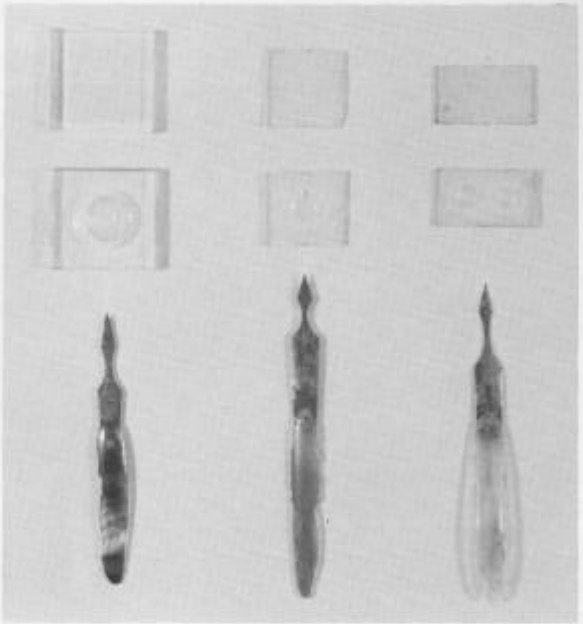
⑲大野藩校使用　蘭学図書

㉑紙本墨彩　橋本左内図像



㉒橋本左内筆　「洋学御端立」の記

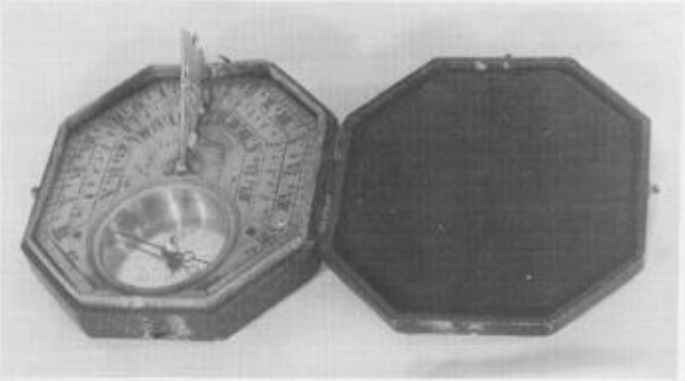
㉒キュンストレーキ男・女体

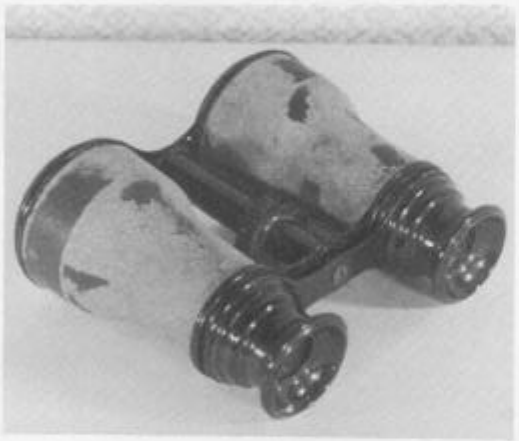


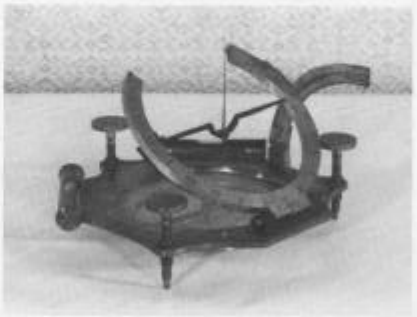
㉗笠原白翁所用　種痘器具

㉘笠原白翁所用　写真鏡

㉙松平春嶽所用　舶来科学器械類







「若越の外来文化展」解説目録

Ⅰ 大陸との交渉

(1) 古代

(イ) 唐文化

①銅造　伯牙弾琴鏡　一面

この鏡は、昭和十三年五月、今立郡池田町常安の王神の森地籍に於て、道路改修工事の際に出土したものである。

鏡背文は、冴えわたる月明のもと、名手伯牙の弾ずる琴の音に、鳥獣草木がいたく感動している詩的な情景を、浮き彫りに表出したもので、中国の古典的物語にもとづいてつくられたものである。

李白、杜甫など多くの詩人を輩出した唐代には、この詩情豊かな故事が愛されて、伯牙が琴を弾く背文のある鏡が盛んにつくられた。そして我が国へも舶載され、また我が国では、その頃唐文化の影響下にあったので、その倣製鏡もつくられた。

この鏡は、奈良朝の頃のものであり、しかも当時の貴族が所有していたものとみられるものであるが、それが、どうして草深い山間のこの池田に、もたらされたのであろうかと思われる。今のところ全く知るすべがないが、文化の交渉関係を思うとき、この様な詩情の高い鏡が出土したことは、池田の昔に対して限りない夢がさそわれてならない。

なお、この鏡の周囲には銘文帯があるが、文字の判読が困難である。径、一六・八糎。

池田町常安　日野宮神社蔵

(ロ) 半島文化

②須恵器。壺・瓶・高坏。（福井市足羽山古墳群、同市末町等出土。）　三点

古墳時代後半期より平安時代の終りにかけて作られた陶質の土器で、成形には、たたき具を用いた手作りの手法と、轆轤の技術を併用し、登窯による高火度の還元焔焼成が行われた。前代の弥生式土器の伝統を引く、土師器のように、我国在来の技術から発生したものではなく、南朝鮮を経て伝わった外来の技法によって、相当規模の工業的な生産によったものと思われる。日本書紀、雄略天皇七年（四六三）の條には、百済（南朝鮮の国名）から「新漢陶部高貴」という工人を招いて製陶に従事させたいという記事があり、これは考古学的調査の結果とも一致している。従って、我国における初期の須恵器生産は、こうした帰化工人の手によってなされ、その作風に半島的な色彩が濃いのである。

越前は、我国六古窯の一つに数えられる地域であるが、半島より渡来した須恵器生産の時代に、いちはやくその基礎が置かれていたのである。　本館蔵

○参考資料。半島出土、台付長頸壺・高坏。（出土地不詳。）

③重要文化財　絹本着色　主夜神像　一幅

紫色に染めた絹に金泥で描き、尊容の口唇に僅かに朱を施してある。上部の円相中に観音を下部に善財童子を配し、小波の間に小舟、楼台、獣類等を描いている。画中に「功徳主咸安郡夫人」の銘があり、朝鮮で製作されたものであることが知られる。尊容や岩の描写法等から高麗時代（西暦九一八～一三九二）末期のものと考えられている。

主夜神は、夜闇を司り、海陸において人々の危険や恐怖を除く神とされ、朝鮮においては、海上交通の守護神として尊崇されていたものと思われる。

敦賀は、古くより半島との海上交通の要地として栄えたが、そうした土地柄を考えれば、この図が西福寺に伝来したことも不思議ではなく、越前と半島文化の交渉史を考える上でも、貴重な遺作である。

敦賀市原　西福寺蔵

④重要文化財　絹本着色　阿弥陀如来図像　一幀

朱衣をまとい、五色に彩どられた雲に乗った迎接の阿弥陀如来である。描線は流麗で、衣の文様彩色も美しく精緻である。製作年代は正確に知り得ないが、高麗時代（西暦九一八～一三九二）の代表的な仏画で、その洗練された描写様式よりみて、南宋の正統的な仏画を学んだ絵師の手になるものと思われる。

高麗仏画の代表的な遺作としての価値は勿論のことであるが、西福寺のある敦賀と半島文化の交渉史を考える上でも、極めて貴重な意義を有している。

敦賀市原　西福寺蔵

○参考資料。国宝　朝鮮鐘　写真。　一点

現在、我国に伝わる鐘は、様式的に純日本風の和鐘、朝鮮鐘、支那鐘、南蛮鐘に大別される。この鐘は、その内の代表的な朝鮮鐘であり、総高一一一・五センチ、口径六六・六センチある。

当鐘の特長は、一般にみられる縦横の紐がないことで、また鐘を釣上げる部分の龍頭が、笠上の珠を咬もうとする龍と筒状の旗挿というものからなり、これは朝鮮鐘にみられる通例の形式である。また上帯・下帯は海磯文様を連続し、四方の乳の間に九箇の乳を置いて唐草文帯で囲み、下方には八葉複弁の撞座と飛天二体を交互に配してある。銘文中に「太和七年三月日菁州蓮池寺」と唐の文宗時代の年号があって、西暦八三三年に製作された新羅時代のものであることが知られる。

大分の宇佐神宮、広島照蓮寺、兵庫尾上神社等、我国渡来の朝鮮鐘は多数現存するが、中でも当鐘は年紀銘が最も古い優品で、国宝に指定されている。

敦賀市常宮　常宮神社蔵

(2) 中世以降

(イ) 宋文化

⑤紙本墨彩　風竹図　一幅

宋代第一の詩人と称せられる蘇軾（蘇東坡）の筆と伝えられる水墨画である。水墨画は、墨一色の濃淡、洸し等によって五彩（五つの色）を表わしうるとした絵画の様式で、唐代中期より起こったと伝えられるが、宋代に至り、その技法が完成された。我国へは、鎌倉時代以後、禅宗の伝来と共に流入し、室町時代に全盛期を迎え、如拙、周文を経て雪舟が登

場して、山水画を中心とする日本の水墨画様式が確立される。こうした水墨画は、禅の境地と密接な関連をもって発展し、最も気韻を尚び、胸中の山水を描くことを目的とし、心で描き心で味うべきものとされる。

この風竹画も、今にも根こそぎ吹飛ばされそうになりながら、敢然と抵抗する嵐の中の猛宗竹を描き、宗教的な信念の強固さや、俗世における苦難克服を諭したものといわれる。尚、永平寺には本図と好一対をなす風竹図が蔵されている。

蘇軾（蘇東坡）は、宋代の文豪として名高い蘇洵の子で、学識深く、宋朝に仕えて諸官を歴任し、蜀派と称する学派を打立てた。文は、韓愈、欧陽脩についで復古を唱へ、唐宋八大家の一人。詩は宋代第一と称せられ、書や絵事にもすぐれていた。建中靖国の初（一一〇一）歿する。

⑥福井県指定文化財　絹本着色　雲居道膺和尚図像　一　幅　　敦賀市原　西福寺蔵

絹本に淡彩で雲居道膺の上半身を画面一杯に大きく描いた頂相（禅僧の人格を中心とする肖像画）である。下地に胡粉を用い、禅僧の風格を写実的な筆致で、的確に描きだしている。上部の「正慶癸酉（二年、一三三三）」付の賛は、宝慶寺開山寂円に師事し、永平寺五世の貫主となった義雲の筆になる。

雲居道膺は唐代の禅僧で、直隷省遵化州に生まれ、幼くして出家、范陽の延寿寺等で修行の後、洞山良价に師事して開悟し、その法脈を継いだ。雲居山に住して人々を教化したため、雲居道膺と称せられ、天復二年（九〇二）正月寂した。

道元を慕って来朝し、のちに宝慶寺を開いた宋僧寂円の師天童如浄は、この道膺の法流をくむ十一世の後裔であるところから、この図像が寂円に伝えられ、我国に招来されたものである。同じく寂円が持参した「如浄禅師図像」と共に、宋代の肖像画として、その後の我国の頂相製作に与えた影響は大きい。

⑦福井県指定文化財　絹本着色　伝如浄禅師図像　一　幅　　大野市宝慶寺　宝慶寺蔵

絹本に水墨淡彩を用い、袈裟を着け曲彔（僧が法式の際用いる椅子）に座した禅僧の全身像である。簡潔な描線と、淡い感じの彩色の効果は、頂相（禅僧の肖像画）の写実的本領をよく発揮している。上部の賛は、如浄が付したもので、それによると、後に宝慶寺を開いた寂円が、浙江省天童景徳寺に於いて、師如浄の画像に賛題を乞い、出来上ったものであることが知られる。

如浄は、南宋中期、浙江省寧波府に生まれ、十九歳の時禅門に入り、足菴智鑑に師事してその法嗣となり、華蔵褒忠寺、建康清涼寺、台州浄土寺、四明天童山景徳寺等の住持をつとめ、その間我国より留学修業した道元に曹洞の大法を伝授した。

この図像も、雲居道膺和尚図像と同じく、寂円が宋から持参したもので、我国に於ける頂相製作に、大きな影響を与えた。

⑧福井県指定文化財　絹本着色　釈迦三尊図像　一　幅　　大野市宝慶寺　宝慶寺蔵

中尊として台座の上に倚座する釈迦如来を正面に大きく描き、左右に侍立する普賢、文珠の両菩薩を配した、所謂三尊形式の図像である。

中尊は、やや黄土に近い彩色の仏身に、朱線の輪廓を施し、衣紋の文様も大まかで、色調も明るく単調である。脇侍の両菩薩は、これと対照的に幾分暗く、彩色も豊富に細微に描かれており、図像全体として壮重な画趣が表出されている。

この図像も宝慶寺開山寂円が来朝の際、宋より招来したも

ので、そうした伝来の確実さと共に、我国の絵画史上に影響を与えた宋画としても、大きな価値を有している。

大野市宝慶寺　宝慶寺蔵

○参考資料。木造　釈迦如来頭部残欠像　写真　一　点

この仏頭は、荒島神社の御神体で、古くは荒島岳の山中に祀られていたということである。

この像の頭部の髪は、恰かも縄状に彫出されていて、右旋相や粒状につくられている通常の如来の螺髪とは、その形が甚だ異なっているが、それはこの像が、俗に清涼寺様式といわれる形に、つくられているからである。

京都の嵯峨にある清涼寺の本尊釈迦如来像は、頭髪が縄状につくられ、衲衣の衣文も波状に彫出されているなど、全く特異な形相の像であるが、この清涼寺様式の像というのは、その特異な形相を模刻して、つくられた像のことをいうのである。

清涼寺の釈迦像は、胎内納入品の記録によると、中国の宋に於て、九八五年、仏師張兄弟（延皎、延襲）の手によりつくられ、永延元年（九八七）に帰国した僧奝然により、我が国に将来されたもので、その特異な形相は、早くから栴檀瑞像として、世の注目をうけていた。

そしてその像の模刻をすることも、鎌倉の頃よりおこり、それが次第に地方へと伝播していった。

荒島神社のこの仏頭は、顎下から頭頂までの高さが四二糎もあって、法量は等身大以上のものであり、それが細部の彫出までも模刻が精密になされているので、この様式の像としては、全く本格的な像であるが、本県内にはこの像の他にも、略式の模刻ながら、この様式の影響をうけてつくられたとみられるものに、次の様な像がある。

小浜市谷田部谷田寺、千手観音頂仏

大野市中津川白山神社、十一面観音頂仏

鯖江市尾花長福寺　釈迦如来立像

右の像は何れも、頭部の髪の彫出に於てのみ、略式ながらその様式が認められるのである。

大野市佐開　荒島神社蔵

(ロ) 明　文　化

⑨絹本着色　花鳥図　一　幅

本図を所蔵する大安寺は、福井四代藩主光通の創建にかかる寺で、同寺には数多くの什宝を所蔵しているが、その大部分は、重要文化財の明兆筆羅漢図をはじめ、歴代藩主の寄進によるものである。

本図は、明代の花鳥画家周之冕の描いたもので、淡彩を用いて、淡い色調のもとに、自然の情趣をよく描き出して、その画風は一見、陸包山、陳白陽、徐天池などの没骨による南宗水彩式の文人画と、よく似ているが、よくみると僅かの部分の色相の変化にも、それをのがさず捉えて、自然の深みを描き出しているなどは、彼特有の描法であるといってよく、いわゆる勾花点葉体と称せられている画風のものである。

この様な描き方は、黄氏体といわれている黄筌の画風を、淡彩で以て描きあげているもので、その源流を尋ねれば、宋元朝の画院に於ける花鳥画の画風（宋元院体）の流れを汲むものである。写生重視の態度が根底にある描き方で、我が国の絵画にも、その画風は大きな影響を与えた。

字は服郷、小容と号し、明朝後期、呉郡の人である。

註　没骨描法

主として花鳥画における描法の一つで、描く対象をよく

観察し、心象に捉えたものを輪郭線を描かないで直接に水墨または彩色で描きあらわす技法をいう。

福井市田ノ谷　大安寺蔵

⑩絹本着色　仙人図　　一　幅

本図は、明代に於ける浙派の画風を汲み、在野の山水画家として活躍した張路（平山）の描いたもので、筆墨の調子は幾分強いが、彼の作品としては比較的感情のはげしさがみられないものである。

浙派といわれる画風は、浙江省銭塘の人、戴文進によってはじめられたもので、彼は元代の院体山水画や、唐末以降の水墨画法、江南地方に伝わる水墨画法等を、つきまぜてこの画法を完成させたのであった。そしてこの画法は、明朝に於て復活された官の「画院」に於ける絵画の主要な様式とされてきた。

始祖戴文進の絵には、それほどはげしさや表現過剰を感ずる作品はなかったが、李在、呉小僊、鍾欽礼と時代を経るに従って、荒々しい筆致のものとなり、この画法は官の画院に於てばかりでなく、民間の画家によっても取り上げられて、張路（平山）、蔣三松らにも受け継がれ、画院におけるもの以上に、強烈な表現をこととする作品を多く描いていった。

福井市田ノ谷　大安寺蔵

⑪絹本着色　東籬図　　一　幅

本図は小浜市西津の廻漕業山川家千石荘旧蔵のもので、明朝写意派の文人画家として知られている陸包山が描いたものである。

陸包山は、花鳥画を得意とする南宗文人画の流れをくむ画家であるが、その手法は、水墨に水彩を用い、然も没骨の描法を以て描くもので、その点では、前代に見ない手法を用いて描いている画家であった。

もっともこの様な手法を以て描いた画家は、明代に於ては陸包山ばかりではなく、南宗文人画の流れをくむ花鳥画の作家の間に於ては、何れもみな試みているもので、沈石田あたりより起こって、陳白陽、陸包山、徐天池等が、これを最もよく用いたと言われている。この図にも、菊の描写に於て、それが鮮かに用いられている。

彼は非常な勉強家で、条種の描法の研究も精力的に手がけている。この図の古木の描法は、没骨による菊の描写とは異なって、官画風の用筆と画趣がただよっているが、これは北宋の画法を試みているためで、それが文人画の本領である自由な用筆の花鳥とよく調和して、美しい画面を構成し、そこに彼特有の画境を描き出している。

本図は菊を描いて、「東籬図」と画題がつけられているが、これは陶渕明の故事に、菊に「東籬君子」という異名がつけられているところに従って、つけられたものである。

中国の画題には、故事を引用してつけているものが多く、中国では文人は故事に精通することが、大切な教養の一つとされていた。

遠敷郡上中町市場　中西歛三氏蔵

⑫木造　聖観音菩薩立像　　一　軀

本像は、真宗出雲寺派本山豪摂寺内事に於て管長が奉祀している像で、大陸より舶載されたものであると伝えられている。

豊麗な肉身部の表出と、抑揚を避けて、自然の姿そのままに表出されている衣褶などによって、そこに彫成されている像容には、官能的な感じと異国の情緒がただよい、みている者をして、恰かも実在の人間に接しているかの様な感を与え

るもので、この像のすぐれた写実性を知ることが出来る。

しかしこうした優れた彫出の中にも、よくみると、宝冠、裳裾、瓔珞などの裳や装厳具の彫出は、幾分類型的で、巧緻性に富んだ彫出がなされており、工芸的な表出に通ずる感じさえあって、この像が彫出された時の、時代の風潮をそこにみることが出来る。

尊像と台座が一木を以て彫成されており、総高一三二・七糎、内像高一〇三糎、肘張三六糎で、法量としてもかなりの像である。

本像は、表現、手法等からみて、明時代につくられたものと思われるが、明代の彫像は技巧的にすぎ、工芸的で、然も小品が多いのであるが、本像の如くかなり大きな法量のもとに、彫刻的にも本質的な表現とみられる、官能的で異国情緒のただよう表出がなされていることは、異色の像であるということが出来る。

なお中国の明代に於ける仏教は、人間のいつわらない真実の欲望である「延命増益」の願いがとり上げられ、その欲求をみたしてくれるものとして、仏教の現世利益的な解釈が普遍化し、観音信仰が特に盛んとなっていった。そして多くのこの様な観音像がつくられたのであった。

武生市清水頭　藤光曜氏蔵

⑬⑭⑮八十一難経並びに図　明版・越前版・越前版版木

単に「難経」とも呼ばれ、周代の名医扁鵲が著述した医書である。我国でも、延喜式に医生の講議すべき書とされているなど、古代より、医学を志す者に重視された。

明版「新刊勿聴子俗解八十一難経」は、明の熊宗立が註解を施し、成化五年（一四六九）一冊本として出版したもので、かつて明に留学して医学を学び、のち越前に来て朝倉氏に仕えた谷野一栢が持参したものである。（福井市　三崎玉雲氏蔵）

越前版「八十一難経」三冊本は、谷野一栢が、天文五年（一五三六）、国主朝倉孝景の保護のもと、越前一乗谷において、熊宗立が註解を加えた明版難経を校正して出版したものである。当時一乗谷には、荒廃した京都を逃れて当代一流の学者・文化人が来遊し、高い文化水準を誇っていたが、この書は、そうした朝倉文化を偲ぶ数少い遺産の一つであり、一栢の養子となって医薬の法を伝授された三反崎安指（朝倉氏一族）の後裔三崎家に伝来した善本である。（県指定文化財　福井市　三崎玉雲氏蔵）

越前版難経版木は、近年西福寺の他の版木中から偶然発見されたもので、六枚十九丁分を現存するのみであるが、谷野一栢上梓の難経版木に相当するものとして、史料価値が極めて高い。「佐柿国吉籠城記」には、国吉城主栗屋勝久が、一乗谷落城の際、この版木を戦利品として持帰り西福寺へ寄進したとの記事がある。（県指定文化財　敦賀市　西福寺蔵）

谷野一栢

一栢は奈良の真言僧で、明に留学して医学を修め、また易学にも通じていたという。天文元年（一五三二）、越前国主朝倉孝景に招かれて、一乗城下に下向し、その医官となる。同五年（一五三六）、孝景の援助を得て「八十一難経」を出版、朝倉氏の一族三反崎安景の子安指を養子として、医薬の法を伝授した。孝景は一栢のため一乗谷に程近い高尾の地に、薬師堂を建立して難経の版木を収め、医学の発展と人々の救済に役立たせた。生歿年不詳。

II 西欧との交渉

(1) 中世

◎ 南蛮文化

⑯重要文化財　紙本着色　世界図屏風　　一　幅

日本図と共に一双をなし、豪華な桃山時代様式を示す代表的な地図屏風として知られ、左端に狩野永徳の壺印がある。永徳の印については、今日いまだ結論が出されていないが、この印や、朝鮮半島北東に「おらんかい」という地名が記入されていることなどから、文禄二年（一五九三）前後に製作されたものと推定され、現存する地図屏風中製作年代の古さと、すぐれた表現とを誇るものである。

今日に伝わる世界図屏風には、狩野派画家の描いたものと、イエズス会の画学校で作られた洋画系のものと二系統があり、前者は大部分片双に日本図屏風をもっている。また、こうした世界図屏風の原図は、当時のポルトガル船の具えていた航海図的なものではなく、一五七〇～八〇年代に、西欧で公刊された。二種ないし三種の内容と図式の異なる世界地図に拠ったものであることが知られている。

こうした屏風は、南蛮文化の伝来とともに、世界への関心がたかまり、舶載の地図をもとにして多数製作されたのである。

福井市西木田　浄得寺蔵

⑰紙本着色　世界図屏風　　一　幅

浄得寺所蔵のものと同様、日本図屏風と一双をなしている。浄得寺様式の世界図が、太西洋を画面の中央において、ヨーロッパ中心に描いてあるのに対して、この図は太平洋を真中に位置させ、我国が画面の中央付近にくるよう配慮している。また、対をなす日本図が、我国古来の行基式で、古式の南を上に北を下にする方法がとられているのも、この屏風の特徴である。

他の世界・日本地図屏風に比べ、多分に装飾的要素が加味され、地図をモチーフとした一種の絵画屏風としても鑑賞出来るよう工夫されている。

小浜市伏原　発心寺蔵

⑱紙本着色　南蛮船図屏風　　一　幅

本図は、南蛮船が大洋を航行中の様子を、二枚折屏風に描いたもので、桃山乃至は近世初頭の頃に描かれたものと思われる。

絵は、当時の我国の風俗とは全く異なる南蛮人の洋上生活を画材としているもので、絵具は我国在来のものの様であるが、着彩も用筆も、手法は洋式に近いもので、一見不馴れな用筆の様にみえるが、描く内容も手法も共に、従来の絵とは全く趣を異にしているもので、文化史的には高い意義をもつものである。

この様な絵画の制作は、桃山時代の頃に流行をみたもので、当時、南蛮人といわれたポルトガル人やスペイン人等の西洋人によって、もたらされた西洋の文物や風俗が、当時の人々には非常に珍しく、大きな刺戟となってこれに対し深い関心をもたせていた。そして流行をみたのであった。

然し、この流行も、キリスト教の布教と深い関係があるもので、はじめは宣教師たちによって宗教画がもたらされ、また日本人画家も、その宗教画を描くことから、西洋風の絵をはじめたものであった。

そしてそれが宗教以外のことにも及んで、南蛮人のもたら

した風俗等が絵の対象となり、やがて種々の文物までも美術の対象となって、ここに南蛮美術の流行をみたのであった。

しかし、江戸時代ひ入ると、キリスト教の布教と深い関係のある南蛮美術は、キリシタンの禁止政策の実施と共に、急に姿を消すこととなった。

今は各地に僅かに遺存しているが、それらの多くは、永年、日の目をみずに秘蔵されてきたものである。

福井市田ノ谷　大安寺蔵

(2) 近世以降

◎ 蘭学等の西欧文化

⑲大野藩校　洋学館旧蔵洋書類　七部

福沢諭吉は「梅里余稿」の巻末に「宝暦明和以来八、九十年間の蘭学は、医師の蘭学にしたるものなれども、弘化嘉永以後の蘭学は士族を蘭学にしたるものなり」と述べたごとく、医学と兵学とは蘭学史上の二大主流であった。

そのため若越の各藩も諸雄藩と競いつつ軍備の充実に努め、盛んに蘭書の翻訳をし、藩士の蘭学の研究、蘭学者の招聘等に力を尽し、砲術の改革、部隊の改編訓練等を行ったのである。事実福井藩の場合も現存する蘭書目録等により、その状況を推察できるが、現物蘭書の多くを散佚した今日、大野洋学館旧蔵の医学・兵学等各分野にわたる多数の蘭書（翻訳書も含む）は、極めて貴重な存在である。

大野市城　県立大野高等学校蔵

⑳橋本左内筆「洋学御端立」の記　一冊

安政四年（一八五七）四月、福井藩校明道館内に洋書習学所を設置することを建議した橋本左内が、自己の雑記帳に書留めた布令原案である。（端立とは、正しく立てる意味。）

ここに示された左内の意見は、当時の福井藩の洋学受容に対する態度を代表するものであり、洋学はあくまで我国の立遅れた科学技術の分野を補足するために学ぶものであり、必らず和漢の学を修めた優秀な人材を選び学習させ、その進んだ学術に傾倒して心まで奮われ、みだりに「外国を誇称して、皇国（日本）を卑視」することのないよう、厳重な注意をすべきであることを強調している。

福井市春嶽公記念文庫蔵

洋学御端立

洋学之儀筋合正しく相開候時ハ、其利夥有之候得共、萬一杜撰ニ相成候時ハ、其害亦言ふへからず。此天地間有力俊偉之者皆然り、啻洋学而已ならず、水火の如き亦然り。凡大ニ人を利スル者ハ、亦必大ニ人ヲ害する幣なき事能はず。故ニ此学之開闢始ニ於て丁重用心可致也。

㉑紙本墨彩　橋本左内図像　一幅

橋本左内歿後十六年を経た明治八年に、橋本家からの依頼により、佐々木長淳が記憶をもとに描いた肖像と、同年五月二十一日付の松平春嶽筆「橋本左内小伝」とを一幅に仕立てたものである。

長淳は福井藩士として天保元年（一八三〇）に生まれ、御製造方頭取役に任じ大小銃砲・火薬・蒸汽船等の製造に当たった。慶応三年四月、兵器購入の命を帯びて米国に出張、維新後は工部省に出仕し活躍した。橋本左内とは親戚である上に年令も近く、共に洋学を研究し、常に親しく交わった間柄であった。

福井市春嶽公記念文庫蔵

㉒キュンストレーキ男・女体　二　軀

キュンストレーキとは、オランダ語で紙製人体模型のことである。

男体は万延元年（一八六〇）福井藩が八百両で長崎の蘭館医を通してフランスより購入し、女体は明治二年（一八六九）に購入した。現在同種のものは、金沢と長崎の両大学にのこっているのみである。

当時の医学生は解剖学を習うのに刑屍を使ったものであるが、それも藩の厳重な許可を要し入手困難であったので、やむなく、このような模型を使っていた。両体とも極めて精巧に出来ており、血管・神経・筋肉・臓器等にラテン語、フランス語で原名が付されている。

男体は一部腐蝕しているものの、おおよそ旧体のままであり、女体は一見新しく見えるが、これは昭和初期塗装修復されたためである。

福井市医師会蔵

㉓笠原白翁所用　種痘器具　一　式

弘化三年（一八四六）、牛痘苗を幕府の力で輸入することを藩に請願した白翁は、同時に種痘用のメスや痘痂貯蔵について熱心な研究を進めた。殊に、海外より多くの日数をかけて取寄せねばならない痘痂を変質させずに入手するため、師日野鼎哉の高弟桐山元中と共に、ガラス製の小容器を考案した。

ここに展示した器具は、白翁のこうした研究の結果、作りだされたものである。

本館蔵

○参考資料。現在の種痘器具　一　式

福井市医師会蔵

㉔笠原文書所収　幕末種痘関係記録　十　点

○「牛痘鑑法」草稿　一　冊

「牛痘鑑法」は、出版に至らなかった白翁の著述で、当時の医師を対象に、種痘後天然痘に対する免疫が確実に生じたか否かを鑑定する重用性を説いたものである。

白翁は、福井における「蘭社の棟梁」と称される程に、洋学、特に蘭法医学の研讃につとめたが、一方では田中大秀の門人として国学についても深い造詣を持っていて、洋学の優秀性を認めても、決して西洋崇拝におちいることがなかった。

この「牛痘鑑法」の扉部分にも、白翁の学問観を示す「毎旦（毎朝）奉二礼大小二柱神像一」「終歳耽二読東西万邦之書一」の連句があげられ、白翁が広く海外の書物を読んで新知識を吸収すると同時に、毎朝祭壇を礼拝して日本人としての自覚を日々新にする必要を痛感していたことが知られる。

○白神痘御用留　第二～第九　八　冊

笠原白翁の種痘普及活動の全貌を物語る貴重史料で、痘苗接種活動に関係した様々の人々との往復書翰、藩の布令等を年月日順に記録したもの。

嘉永二年（一八四九）九月より、安政六年（一八五九）六月までの八冊が現存し、全編白翁の自筆である。

○戦兢録　一　冊

本書は、笠原白翁が嘉永二年（一八四九）九月末、痘苗を求めて長崎に向け出発したところから始まり、既に痘苗がとどけられていた京都に逗留しつつ、師日野鼎哉や桐山元中等と除痘所を開設して種継ぎをし、在洛四十数日を経て、十一月十九日、京都にて種付をした二児、

および道中にて接種すべく福井から迎えた二児、各両親の十二名を連れて京都を出発、二十五日福井に戻り、福井で種痘が開始されるまでの道中日記である。

本館蔵

㉕笠原白翁旧蔵「扶氏経験遺訓」写本　四　冊

本書は、ドイツの医学者フーフェランドが論述した「医学臨床必携」とも称すべき書物で、我国の蘭学盛行時に蘭学研究家や蘭法医が、こぞって入手につとめ、読みふけったものである。緒方洪庵をはじめ多くの蘭学者が、種々の翻訳を行ったが、白翁はそうした翻訳書に頼らず、蘭文原典の入手を希望し、嘉永四年（一八五一）以降、大阪緒方塾（適塾）に遊学中の橋本左内や弟笠原建蔵の協力を得て、同塾生に筆写を依頼し、二年後この書の全文を購入した。

能筆の鵞ペンで丁寧に書写された善本であり、各巻に不審紙（紅どうし）が貼付され、白翁の熱心な学究態度がしのばれる。

本館蔵

㉖佐々木長淳所用兵器・砲術関係　洋書　二　冊

「欧羅巴三軍詳説」　（一八六一年刊）

ヴァン・リードの献辞がある佐々木長淳（権六）の蔵書で、欧州の軍事に関する兵学書である。

リードは、幕末より米商として横浜に来住し、ハワイ政府の総領事等をつとめた。

「海軍射放表書」　（一八六五刊）

佐々木長淳（権六）が兵器研究のため使用した米書とメモ。

本館蔵

㉗日下部太郎米国留学中使用の洋書類　十　冊

日下部太郎が、米国ライガース大学在学中に使用した書籍で、太郎の客死後、同大学から福井に招かれたW・E・グリフィスが、明治四年、遺品の一部として持参したものである。歴史、地理、数学、化学など多分野にわたり、太郎の彼地での勉学ぶりがしのばれる。

本館蔵

㉘笠原白翁所用「写真鏡」　一台

白翁は、私利を度外にした献身的な種痘普及活動や、医学研鑽のかたわら、医黌（医学校）設立など自己の理想実現のため、養豚・養鶏など、蘭学者としての知識を生かした、いくつかの事業を試み、財源の拈出に努力した。しかもそれらは、福井において最初の企ばかりであった。

この写真機も、白翁のそうした事業の一つに利用されたもので、万延年中（一八六〇）美濃の写真師から購入し、福井城下浜町の大安寺別荘内に写真館を設け、城下の士民を撮影したものである。

本館蔵

㉙松平春嶽所用　舶来科学器械類　二十点

松平春嶽が、幕末から明治にかけて使用した科学器械類。米・英・独製。

福井市春嶽公記念文庫蔵

昭和51年 9 月30日　発行

若越の外来文化展
解説総目録

編集　福井市立郷土歴史博物館
印刷　河和田屋印刷株式会社

昭和51年10月1日――10月31日

福井市立郷土歴史博物館